
「第 11 回関西スペイン語教師の集い（第 134 回関西スペイン語教授法ワークショップ(TADESKA)」
開催の報告

IX Encuentro de Profesores de Español en Kansai (CXXXIV Reunión del Taller de Didáctica de Español de Kansai)

日時：2020年2月25日（火）10:40・16:40

場所：関西学院大学梅田キャンパス(ハブスクエア) 1405 教室

テーマ：教科書が学生にとってより価値あるものであるために一和書の場合―

参加人数：14名

* Fecha y hora: Martes, 25 de febrero de 2020, de 10:40 a 16:40

* Lugar: Universidad Kwansei Gakuin, Campus de Umeda "K.G. Hub Square", Aula 1405

* Tema: ¿Qué podemos hacer para que los libros de texto publicados en Japón sean más valiosos para los estudiantes?

* Participantes: 14 personas

テーマ：教科書が学生にとってより価値あるものであるために一和書の場合―

教科書が、購入者である学生にとってより価値あるものであるため、学生、教員、そして出版社それぞれの観点を持ち寄り、実施済みのアンケート結果をもとに話し合う。立場が異なるために生じやすい疑問を解決し、共有して取り組むべき課題を明らかにしていく。

今回の活動の流れ

	ディスカッションの方法	話し合う内容	話題の処理
活動1	全体ディスカッション (X 出版社担当者をまじえ)	参加者がアンケート結果から選んだ「関心事項」をすべて(掘り下げない)	合意ができたもの→解決 解決の難しいもの→活動2へ
活動2	全体ディスカッション (Y 出版社担当者をまじえ)	立場の違いにより問題(特に乖離)が生じやすい事柄を①関係図、②フローチャートに位置づけて掘り下げていく。	完全な合意にはいかず、話し合いの中で各自にとってだんだん見えてくるものがあればよしとする。
活動3	グループディスカッション	出版社から教員への質問事項に答える。その他自由(これからの教科書の在り方など)。	出版社への回答 話題の共有(結論なし)

なお、ディスカッション内の出版社担当者のコメントは、担当者の見解であり、社や複数の出版社の見解を代表するものではない。

導入

①参加者が3つのアンケート結果を見て、「関心事項」を1～2つ選ぶ。

3つのアンケート：1) 学生アンケート、2) 教員アンケート、3) 出版社アンケート

(1) 2)の結果はイベントに先立ってファイルで配布。3)の結果は当日紙配布)

関心事項：アンケートの回答を見て、参加者個人が特に気になったこと。

②参加者の「関心事項」を、各アンケートの各質問の順番に整理する。

整理方法：各アンケートの質問番号一覧表に、各自が自分の「関心事項」を位置づける。

その一覧表を司会者が1つの質問番号一覧に集約する。

その一覧表の配置に従って、各参加者が「関心事項」を板書する。

③板書された「関心事項」を、司会者が「活動1、2、3」に仕分ける。

この方法を取った理由：

- ・参加者全員(司会者を除く14名)の「関心事項」を必ずどこかで取り上げるようにする。
- ・話題となる「関心事項」を、なるべく整理された形で共有する。

活動1：全体ディスカッション

導入コーナーで挙がった「関心事項」に順番に触れていく。

①出版社アンケート結果より

Q2. 出版社から見て、学生アンケートにある要望事項のうち、比較的簡単に実現できるものは？

- ◆ 日本語訳をつけることは簡単だが、逆に教員はそれでいいのか？
- ◆ 予習をしたり自主的に学習を進めるために訳が欲しい学生と、不真面目で辞書をひいたり学習することをサボりたいから訳が欲しい学生がいるのではないか。
- ◆ 最初からすべての訳が書いてあるものは、容認しにくい。
- ◆ 訳や解答を別冊にしても、次年度からは確実に出回る。
- ◆ 訳が付いていない方がいいという学生もいる。
- ◆ 1年生はゼロベースなので、ある程度日本語があった方がいいかもしれない。
- ◆ 案1) 学期終盤(テスト前)に日本語訳と解答を配布する。試験勉強に役立ててもらおう。
- ◆ 案2) すべて訳したものをつけるのではなく、穴埋めのような訳をつける。教師が訳した日本語を必死に書き写す学生がいるが、それだけに必死になってしまうし、途中で疲れて諦めてしまう可能性もある。能動と受動の間をいくために、部分的に書き込ませる。
- ◆ 案3) 赤字にしてチェックシートで隠せるようにする。←赤字にすることは可能。シートをつけるとコストが上がる。

Q14. デジタル教科書の明確なビジネスモデルは今後できていく？

- ◆ 例えば英語と比べると、スペイン語の市場は圧倒的に小さく、コスト回収の見込みがおそらく立たないので、ビジネスモデルができていくことはあまり期待できないかも。

- ◆ 出版社がプラットフォームを持ったりホームページにコンテンツを用意したりすることは、技術的に可能だとしても、スペイン語業界ではおそらくコスト回収が見込めない。
- ◆ 現状、学生はあまり喜んで音声を聞いたりビデオを観たりしていないように感じる。もっと面白くて見たくなる映像はできないか？
- ◆ ビデオは、正直、素人役者の演技が下手だし、面白くない。
- ◆ 上手な俳優を雇うにしろアニメにするにしろ、コストの問題。
- ◆ デジタル版は、学生とのやり取りの中で生まれる必要性に対応して変更や更新がしやすいという利点がある。

Q23. 出版社から教員に対する質問

- ◆ [A2]教科書の音声はどのような形で提供するのがよいか？ [A3]デジタル版・電子版で授業運営成立するか？という2つの質問への答えを考えたい。
- ◆ [A2]学生がどういう形を望むかは、学生に聞かないと分からない。教師は授業における使い勝手という視点で考えてしまう。
- ◆ 教員に対するある調査では、CDを希望することが多かった。
- ◆ 学生は教科書にCDがついていても封も開けないし、真面目な学生でも1回か2回聞いたら放置。
- ◆ ダウンロードやストリーミングの方が、学生にはまだマシだろう。
- ◆ 最近はさらにスマホやタブレットもサブスクリプションが主流になっていて、出版社のホームページへ行ってダウンロードするという作業のハードルが非常に高い。
- ◆ 授業内で一斉にダウンロードさせたりもするが、教師自身がダウンロードしていなかったりするので、学生ができているかどうか確認しづらい。
- ◆ [A3] 出版社が主導することではなく、むしろ教員や大学が環境として可能かどうかという問題で、こちらが環境を作って出版社に「対応できるものを作って」という順番でないと、出版社はコストのことを考えると動けないだろう。

②教員アンケート結果より

Q2. 教科書が「よくない」「使いにくい」と感じた点は？

- ◆ 自分で選ばず、他の教員に決められてしまうから、不満を持つのではない。
- ◆ 案1) 採用者と使用者の風通しをよくして、お互いコメントしあえるような雰囲気を作る。
- ◆ 案2) ある現場で使うことが決定している教科書を作る著者は、その現場の他の教員たちに製作段階でもっとコメントをもらって、十分時間をかけて作る。

Q6. 他の教員に選定された教科書に不満を持った経験のある教員が多い。

- ◆ 不満があったら、使用者が採用者にきちんと伝えて欲しい。
- ◆ 「変えたい」「良くしたい」という時に、どういうプロセスがあるのかを、教員があまりよく分かっていないようだ。そのことに、アンケート回答を見た出版社は驚いていた印象がある。
- ◆ 訂正箇所などが出版社に伝えられた場合、正誤表を作って次回から挟み込むことも一案だが、コスト面の問題から、ホームページ上で掲載している。

Q16. CEFR について

- ◆ アンケートには「べき」と書かれているが、賛否両論ある。良いと思う部分だけ使っていけばいいと思う。
- ◆ Plan curricular も、日本の学習環境にすべて応用するには無理があることもあるが、参照するくらいには使える。

③学生アンケート結果より ※専攻・非専攻の区別はなし。

Q3. 過去に使った教科書で不満だった点は？ Q5. 英語などの教科書と比べてどう違う？

- ◆ 「文法を軽視している」←文法重視すると嫌がられると思っていたので意外。
- ◆ 「文構造を教えてくれない」←英語との学習スタイルの違いに戸惑う学生が多いのかもしれない。活用とか細かいところばかり強調されて、大きなスケールのルールが明示されていないのかも。
- ◆ 現在、高校ではあまり明示的に文法を習わなくなっている。
- ◆ そもそも大学では授業数が圧倒的に少ないため、英語ほど習得できないという問題もある。
- ◆ 文法を前面に出さないのがトレンドのようにになっているが、全員がそう思っているわけではない。

Q4. 不満な点「授業であまり用いられない」が最多。

- ◆ 教員アンケート「選定された教科書に不満がある」というのと同様関係しているかも。
- ◆ しかし教員それぞれ好きなものを選ぶと、同じ科目で複数開講している場合や、落第して2年目履修している学生など困る。多少使いにくい教科書でも、なんとかやってくれれば採用者は助かる。やはり風通しの問題。
- ◆ 統一教科書の場合、全員が満足する教科書が存在することはほぼありえない。それが分かっているから、「この教科書はやめて欲しい」と採用者に言うことはない。(困る点の相談はする。)
- ◆ 直してほしいことは、著者や採用者に言いにくければ出版社に言うのもアリ。出版社から著者に伝えることができる。
- ◆ 教科書に不満があるというより、時間の都合で練習問題などをとばさざるを得ない場合がある。その場合、解答や解説を配布したりする。

その他

トレンドを取り入れることに関して

- ◆ 出版社としては、廃れてしまうことを考えると、企画するか迷う。
- ◆ 若い教員に新しいものを導入してもらいたい。実際の学生の1日の過ごし方や会話など、記録して教えて欲しい。学生を観察するしかない。
- ◆ その真逆とも言える「スペイン語の名文みたいなのも入れてほしい」という回答が教員アンケートにあった。バランスが大事。

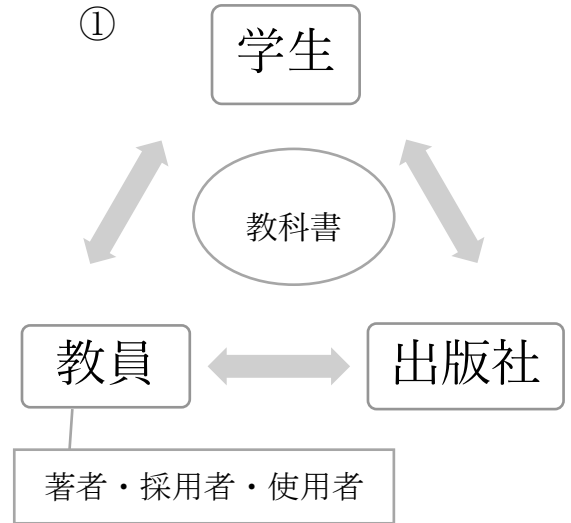
活動2：全体ディスカッション

「活動1」で解決しなかったこと、および、立場の違いにより問題（特に乖離）が生じやすい事柄を、①「学生・教員・出版社」の関係図、②「教科書の一生」フローチャートに位置づけながら、掘り下げる。

「乖離」：背き離れること。

良かれと思っても離れていってしまうことはある。
乖離がどこに生じているか？

学生「高い」＋出版社「価格を下げることは不可能」
∴質を上げて価値を高めるしかない！



②



色なし枠内：出版社＋教員

色付き枠内：出版社

下線付き文字：学生

【教員と出版社との乖離】

- ・編集者との企画後、執筆に入って、著者がランナーズハイのようになって筆が進むのはいいことだが、企画段階で決めたコンセプトから逸脱してくることがある。
- ・著者は執筆段階に入らないと分からないことがある。書きたいことがいっぱいあったり、逆に書きたいことはないのにスペースを埋めなければいけないこともある。
- ・最初にサンプルチャプターを出して OK となった後は、著者は最終章までいっしょに書き上げるまで基本的に編集者には見せない、というのも問題？
- ・編集者は、執筆途中のものを部分的に見せられても、なんとも言えないこともある。
- ・各課を均等割にしないといけないものか？
- ・採用者・使用者側が均等でなくていいということであれば、編集者側が拘ることではない。でも最近はシラバスが書きやすい目次が望まれる傾向が見られ、課割がそろっている方が採用されやすい。
- ・課割が均等であるメリット：年度初めに機械的にシラバスを書きやすい、複数教員でリレーする場合分担しやす、本としての美しさや整っている感がある。デメリット：執筆しにくい個所が出てくる、実際の授業は生き物だから単純に教科書のペースに合わせて進められないこともある。
- ・出版社は売れる（＝採用される）かどうかを必ず念頭に置いて企画など進めるが、著者は必ずしもそうではない。他所で求められているかどうかより、自分がいい（欲しい）と思う形にしたがる。
- ・採用者や使用者が、ある教科書が使いにくいとなった場合にそれを著者にも出版社にも言わずにただ採用しなくなるということがある。もっと風通しをよくして、双方で教科書をよくしていく建設的な働きをした方がいい。
- ・教科書は、著者や採用者は出版社（編集者）と意見交換の機会もあるが、使用者（教員と学生）からの意見が出版社に届きにくい。ユーザーの声が聞こえない状態で制作しなければいけない。
- ・著者はデザインについて介入しにくいことが多いようだが、著者・採用者は内容だけでなくデザインなどについても知識を持って配慮をした方がいい。
- ・校正のプロセスも、企画段階でしっかりつめておくべきだろう。著者によって、第三者に校正を頼みたい人もいれば、第三者の介入を嫌がる人もいる。
- ・教科書は一般書と違って書店（生協など）からの返品条件が厳しい。書店の判断で教員からの発注数より少なく出版社に発注されることもあり、それが学期開始直後に買えない学生が出るという事態につながる可能性もある。
- ・献本は、不要であれば受け取らなくていい。

【教員と学生との乖離】

- ・教科書の解説が多いメリット：
意欲のある学生が教科書だけで予習や自習ができる。
統一教科書を複数の教員が使う場合、ある程度教授内容や説明をそろえることができる。
授業を欠席してしまった学生が、教科書である程度フォローアップできる。
新米教員には安心。
- ・教科書の解説が少ないメリット
そもそも教科書は教員の解説や本人の書込みなどがあってカスタマイズされていくもの。

教員個人のアプローチで説明できる（教科書と説明の仕方が食い違うことがない）。

どの先生にも受け入れてもらえるよう汎用性をもたせることができる。

- ・学習が終わった学生たちに、どこにもっと解説が欲しかったか等のアンケートをとって見たらどうか。
- ・骨格だけの教科書に各教員が肉付けしていくという感覚。でも教員によって肉の付け方が違う。肉の付け方をある程度統一するのが難しい。
- ・教科書と解説を別にしたり、教科書の巻末にまとめて参考書コーナーとするなどはどうか？反転授業の可能性もある。

活動3：グループディスカッション

出版社からの質問事項に教員が答える。その他自由テーマ（これからの教科書の在り方など）。

Q23. A1. (教科書執筆経験のある教員) 執筆のきっかけは？

- ◆ 出版社から声をかけられ関心を持った。
- ◆ 知人に誘われた。
- ◆ いろいろな教科書を使ううちに学生との乖離を感じ、学生のためのものを作りたいかった。
- ◆ 本務校で使用するため、簡単なスペイン語で読める講読の教科書が必要だった。
- ◆ 自分ならこう学びたいというのを形にした。
- ◆ 新たな視点（コンセプト）の教科書を作りたくて出版社に企画を持ち込んだ。

【関連】

- ◆ すでにたくさんの教科書が出版されており、自分に新しい教科書を作れるとは思わないので、執筆していない。
- ◆ 自分にじっくりくる教材がなく、出版社とのつながりがなく献本も少なかったため、自作した。
- ◆ 新人の作る教科書はディフェンスが甘いので、ベテランやネイティブと組む方がいい。ただしお手伝いではなく、一緒に作る。学生に近い感覚と経験が融合される。
- ◆ ベテランの名前が著者に入っている信頼感もある。

Q23. A2. 教科書に付属する音声は、どんな形式がいい？ (CD、ストリーミング、ダウンロード等)

- ◆ アプリになってほしい。
- ◆ 授業で使用する場合、PC やスマホやタブレットから音声を流すことが多い。
- ◆ USB メモリにダウンロードして持ち歩いている。
- ◆ 教員は CD を希望するかもしれないが、学生はストリーミングがいいだろう。
- ◆ CD はもういらぬのではないか。ただし端末を持っていない学生への配慮は必要。
- ◆ 頭出しなど準備をする手間を感ると、自分で発音した方が早い。(日本人教員)
- ◆ 自分で発音するので、音源は必要ない。(ネイティブ教員)
- ◆ 学生に自分で聞いてもらうにはスマホに入れてもらうのが一番だろうが、スマホ本体の容量を占領されたくないだろう。ストリーミングもデータ量制限の問題があるので必ずしも歓迎されない。
- ◆ ストリーミング形式にして家で聞いてくる宿題にすれば、スマホ本体の容量も占領しないし、家の Wi-Fi などを利用すればデータ量制限の問題も解消される。

【関連】

- ◆ ネイティブの発音を聞かせたい気持ちはある。ただ、全員で授業中に聞くというのはニーズに合っているのか？
- ◆ ホームページで、番号だけのリストになってずらっと並んでいるのは使いにくい。
- ◆ トラックを細かくしてほしい。
- ◆ 記事ものは著作権の問題があつてダウンロードできない。
- ◆ 学生にコンテンツを作ってもらって、それをアレンジして音声教材にできないか？それなら学生自身も関心をもってくれる内容になるのでは。

Q23. A3. デジタル版・電子版の授業運営は成立する？

- ◆ 某大学では実際にやっている。生協のサーバーを使う。(紙の) ノートをとる学生もいるし、ゲームをしている学生もいる。
- ◆ 最近、国立大は入学時に PC を買わされるらしい。それが成立するなら、可能かも。
- ◆ e-learning と議論が交錯していた。電子書籍はあってもいいかも。PDF 版で購入できるといいかも。
- ◆ とはいえ紙素材の良さもあるので、そこを理解させておく必要はある。
- ◆ 今、Voicetra というアプリを使用している。
- ◆ PC やスマホを授業で使っていると、学生がよそ事しないように今よりコントロールが必要になりそう。
- ◆ デジタル版や電子版が発達してくると、いつかナマの教員がいなくなる??
- ◆ そもそもビジネスモデルがない。

Q23. A4. どんな授業でどんな教材が不足していると感じる?

- ◆ 作文教材 (←模範解答が作りづらいから教材が増えないのだろう)
- ◆ リスニング教材 (でもナマ教材でできるかも?)
- ◆ 中級 (市場が小さくて売れる見込みがないから企画されないということであれば、オンデマンド印刷なら可能性ある? オンデマンドの価格はどう決まる? オンデマンドは儲からない?)
- ◆ ゲーム感覚で動詞の活用や単語などを覚えるための教材
- ◆ 専攻 1 年生向けの講読
- ◆ ペアで使える教科書
- ◆ 会話向けの教科書で、スペインのものを使う教員が多い。
- ◆ 海外の教科書でいいと思うものが時々見つかるが、価格、サイズ (内容量)、売れ残りなどが気になる。

Q24. A2. 1 つの出版社で複数執筆する人と、複数出版社で執筆する人がいる。それぞれの感想をききたい。

- ◆ 特になし。出版社というより編集者による違いが大きいかも。
- ◆ 企画の問題。
- ◆ この場に該当者はいなかったが、同じ人が違う出版社で似たような教科書を出しているのを見かけるような・・・あれはなぜそうなったのだろう?

【関連】

- ◆ 編集者のハート、粘り強さは素晴らしい。
- ◆ 企画の段階で事前に編集者から、契約的なこと、仕様 (デザインなど) について知らせてもらえる嬉しい。
- ◆ 著者と編集者が二人三脚でいきたいところだが、昨今の大学教員が超多忙。

【その他自由テーマ】

- ◆ 見本 (献本) について
オンデマンドで、ネットで選んだものだけ送ってくれたらうれしい。
- ◆ 自分にぴったり合致する教科書というものは存在しない。もしそれが欲しければ自分で作るしかない。

いだろう。

- ◆ 教師自身が教科書を信用していない感が学生に伝わるのはよくないだろう。
- ◆ 「説明がわかりにくい」という学生コメントについて
文法用語が並んでいるから分かりにくいとか、説明自体が分かりにくいとか、いろいろ考えられる。
- ◆ 例文が難し(複雑)すぎることもある。そこで理解してもらいたい文法事項などに集中して解説できず、困る。(←盛り込みたい気持ちが著者に強すぎるのかも)

(作成日: 2020.3.7. 作成者: 柳田玲奈・小川雅美)

【追記】

- ・新型コロナ感染拡大の影響で出席を取りやめられた方が複数いらっしゃいました。
- ・この企画は、翌月3月に継続する予定でしたが、感染拡大に伴い中止となりました。その後、2020年度はオンライン授業をテーマにしたことにより、企画が中断されました。
- ・以上の理由で、2月・3月の会をまとめた実施報告をアンケート結果と同時にネット掲載することができなくなりました。遅くなりましたが、2021年4月に、上記の実施報告と、アンケート結果を公開致します。ただし、出版社さん向けアンケートについては、慎重に扱う必要がありましたので、現時点では掲載致しません。
- ・この企画の続編は、2021年4月以降行う予定です。

(2021.4.24 小川雅美)